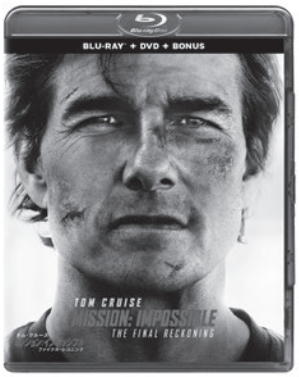
心に残る映画

『ミッション：インポッシブル / ファイナル・レコニング』

2025 年／アメリカ／クリストファー・マッカリー監督作品

令和でもなお進化する ギネス級スタント

会員　首藤 哲伺（70 期）



ミッション：インポッシブル / ファイナル・レコニング
ブルーレイ +DVD セット:5,390 円（税込）
発売・販売元：株式会社ハピネット・メディアマーケティング
©2025 Paramount Pictures. All Rights Reserved.
※商品情報は記事公開時点のものです。最新の内容をご確認ください。

平成生まれの私は昭和を伝聞でしか知らず、大体よく聞かされるのは当時の武勇伝で、「昭和だから許された」で締めくくられるものなのだが、令和になってもなお、昭和武勇伝に負けない無茶なスタントにトム・クルーズが挑むのが「ミッション：インポッシブル」シリーズの醍醐味と言える。

1996年から約30年にわたって愛され続けたこのシリーズが、ついに最終章を迎える。イーサン・ハントの物語がどのような結末を迎えるのか、そしてトム・クルーズは今度はどんな無茶なアクションをスタント無しでやるのか、その答えを確かめずにはいられなかった。

結論から言えば、本作でもトム・クルーズはとんでもないアクションを行っている。トム・クルーズの圧倒的な存在感は今作でも健在で、60歳を超えてなお、命がけのスタントに挑む姿勢には驚嘆せざるを得ない。

特に印象的だったのは、次の３つである。

⑴　回転する潜水艦内での潜水

⑵　空中で飛び回る小型プロペラ機の羽にしがみついてコックピットに飛び乗る

⑶　炎上するパラシュートでのスカイダイビング

なお、⑶のシーンについては「炎上するパラシュートでのダイビング回数最多記録」というギネス記録を取得しており、YouTube上に特別映像が公開されているのだが、その中でトム・クルーズが「冷静に行こう。リスクは取らない」と言っており、彼にとっての「リスク」とは何を指す言葉なのか分からなくなってくる。

「映画として公開されているのだからトム・クルーズは無事なはず」と頭で分かっているのだが、それでもなお、「危ない！」と言いたくなるような緊張感と臨場感が画面越しでも伝わってくる。CGに頼らない実写ならではの迫力は、観る者の心拍数を確実に上げる。

ちなみに、⑴のシーンの水中でトム・クルーズが演じていると分かるために作られた特別なマスクとウェットスーツは、10分間しか着用ができない（長時間使用すると低酸素症になってしまう）という制約があったため、撮影シーン自体十分に不可能なミッションになっていたらしい（トム・クルーズ自身「自分の二酸化炭素を吸い込んでいた。それが体内に蓄積されて肉体に影響を与えるから、それを克服しながら演技に集中する必要があったんだ」というわけのわからないことをインタビューで言っている）。

また、本作は単なる完結編ではなく、シリーズ全体の集大成としても機能しており、シリーズ１に登場した意外な人物が再登場して活躍したり、長年にわたってイーサンと共に戦ってきた仲間たちとの絆が、物語の重要な柱となっている。

特に、ビング・レイムス演じるルーサーとの友情は、単なる仕事上の関係を超えた深い信頼関係として描かれ、長年シリーズを追いかけてきた者の心を打つ。

最後に、本作のヴィラン（悪役）は世界の核兵器を掌握してしまうスーパーAIなのだが、現実世界でもAI作成のCG動画や文章が人々を驚かせている（この文章もたたき台はAIに作らせてみた）。

そんな令和の時代において、あえてCGだけでなく、身体をはった昭和顔負けの無茶なスタントに挑み続ける本作は、将来にわたって私の心に残るだろうと考え、本作を選ばせていただいた（決してたまたま一昨日観に行ったからではない）。